

昭和に始まった事業はすべて『廃止』?!

トップダウンの市政運営が目立つ吹田市で、今すぐめられようとしているのが、「全事務事業ゼロクリア大作戦」。これは、「事業開始から20年以上経過している事務事業については、すべて廃止、事業開始が平成の事業についてもゼロベースから見直ししようとする3カ年の計画です。

「ゼロクリア大作戦」という軽いネーミングとは裏腹に「開始年度が昭和の事業」をいったん廃止して、必要であれば再構築するというすいぶん乱暴なもの。

新政権のすすめる「事業仕分け」には、「仕分け人」の強引なキャラとマスコミの連日の報道のおかげで注目があつりましたが、吹田市はすでに、密室の「事業仕分け」



「ゼロクリア」は昭和か平成かではなく、必要性から判断すべきでは？(写真は吹田市役所)

による事業見直しを行っており、そこへ、さらに重なるこの「ゼロクリア大作戦」には問題点が多くあり、狙いはどこにあるのか、しっかりと注目する必要があるようです。

開始時期ではなく 必要性こそ、見直す基準

第一の問題点は、不況によって住民のくらしが、かつてなく厳しくなっているときに、くらしや福祉にかかわるすべての事業を、「開始年度が昭和の事業」とわざわざ区切って見直す必要があるのか、ということ。事業を見直すのであれば、事業の開始年度にかかわらず、その必要性から判断するのがあたりまえではないでしょうか。

第二の問題点は、榎原・岸田両市政から引き継いで、「福祉の吹田」「子育てするなら吹田」と高く評価されてきた、くらし・福祉にかかわる事業の廃止というのでは、吹田市の事業をまるごと「阪〇色」に染め直すといわんばかりの作戦だということ。第一の問題点は、榎原・岸田両市政から引き継いで、「福祉の吹田」「子育てするなら吹田」と高く評価されてきた、くらし・福祉にかかわる事業の廃止というのでは、吹田市の事業をまるごと「阪〇色」に染め直すといわんばかりの作戦だということ。

第三の問題点は、この間の思い通りの事業がすすめられていることをどう評価するのか、ということ。吹田市は、今年約50億円もの減収が予想されていますが、吹田市は、すでに4000万円もかけて「〇系新幹線」を東部拠点に移設、JR吹田駅前には「観光センター」を設置し、高浜橋ライトアップ事業などを行ってきています。差し迫った必要もない事業に十分な精査も行わず、市民意見も聞かないまま、無造作にお金をつぎこむ一方で、昭和にはじまった事業はすべて廃止せよとは、なんとちくちくはく「作戦」と言わざるをえません。見直すべき対象は、思い通りの市政運営です。

トップダウンに うんざり気味の 市民と職員

市長はしきりに「トップマネジメントの強化」を強調していますが、役所の現場で、まじめに働く職員からは、「トップダウン」「現場を無視した思いつきばかり」とため息や悲

吹田市ではじまった、「ゼロクリア大作戦」

鳴もわきまわっています。国立循環器病センターの突然の東部拠点移転の表明も、これまで吹田市は地元で「現地建て替え」と説明、地域住民の意見をまとめ、ボランティアとして協力してきた自治会や地元団体からは、地元無視もはなはだしい、と反発の声が強まっています。

また、市民サービスの最前線に立つ職員の数を減らし、非正規職員に置き換えながら、部長級以上の幹部職員の数は、お隣の豊中市

の2倍近くこのほりです。また、市長の側近である幹部職員が退職後に、いくつもの職場を渡り歩く「天下り」が容認されている現状もあります。「天下り」渡り鳥の中には、市長と私的旅行に行った先



トップダウンが目立つ(?) 阪口吹田市長

での飲酒運転事件による、処分を受けた元幹部職員も含まれているのですから、現市長の「私物化」「縁故主義」こそ「ゼロクリア」の対象です。すべての事務事業を、「自分色」に仕立て直されては、まさに市政の私物化の極みです。現市政以前から脈々と受け継がれてきた事業をその時代の「市民の色」に「コーディネート」することこそ今の吹田市に求められていることではないのでしょうか。

「こんな大変な内容なのに、関係者をはじめ市民には、いつ誰が、どのような議論をして、何を根拠に、この仕分け」結果になったのか、まったく知らされていない。国の「事業仕分け」では内容はさておき蓮坊さんの顔は見えた。吹田市版「事業仕分け」の責任者はいったい誰なんだ。

「年越し派遣村」で明けた2009年が、「政権交代」で喜ばれようとしている。市民を無視し、誘ふべき市民の財産を平気で足踏にする吹田市の「仕分け人」たちに、その意味はわからないのかもしれない。



かつて多くの女性の交流の場となつた「婦人の家」



経済学者辰巳経世 (吹田市出身)

勝手に吹田遺産 その12

辰巳経世と「婦人の家」の碑

阪急千里山の駅を降りて噴水のある坂道をおとると、閑静な住宅街のなかに今は3階建ての書庫がある更地があります。ここに「辰巳経世記念婦人の家」と刻まれた碑が建っています。碑には「関大で教鞭をとったマルクス経済学者辰巳経世先生が戦前の苦難の時代に志なげで倒れました。戦後、妻であり友であったちえさんが辰巳経世の意志を記念して「婦人の家」として贈られた」という意味のことが記されています。

辰巳経世という人は小林多喜二と同時代に生き、関西大学でマルクス経済学を研究し、学生や労働者に影響をあたえた学者でした。当時の事情からつねに特高警察の監視の対象となっていました。大学を解雇、治安維持法で逮捕され、太平洋戦争のさなか、結核で43年の生涯を閉じました。

この「婦人の家」のいきさつに詳しい同じ町に住む八嶋重美子さんを訪ねました。

「婦人の家」は6年ほど前まであったのだけれど、老朽化していたのと、当時この一帯で連続放火事件があつて、無人で危ないので取り壊し、今は碑と書庫が残されているということでした。



その頃のことを城ゆきさんは「婦人の家は100坪の土地に40坪ほどの平屋建てで8畳と6畳の通し部屋をあけはなっています。新婦人の会の支部総会の会場となつたり、定例のバザーなどは近所の方々によろこばれ、女性たちの交流の場になっていました。また少人数の泊まり込み学習会に使われることもあり、そんなときは遠慮のない笑いにつつまれるのでした」と雑誌に書いています。

丘の上の住宅街にあつて「婦人の家」は女性の地位向上、平和と子育て、革新自治体をめざす大きな流れの一翼を担ったのです。

フォーカス

「あつしには関わりあいのねえごつて」かつての人気ドラマ「木枯し紋次郎」の決めゼリフである。その「木枯し紋次郎」にまつける形で始まったのが「必殺仕掛人」。視聴率は、みるみる「必殺仕掛人」に奪われ、その後「必殺」はシリーズ化もされていく……。そして今、「小泉劇場」への「熱狂」は、「事業仕分け人」たちの「活躍」によってかわられた。しかし、この「事業仕分け」、問答無用で「痛みに耐えよ」と、くらしや福祉、教育などへの国の責任を大きく後退させた小泉流「改革」とは、たまたまたりもする。

ともあれ、マスコミでも上々の評判となつた「事業仕分け」。「必殺」シリーズではないが、この人気に乗っかるうとする人、絶対出てくるよな、と密かに思っていたら、国より先にやっていたところが身近にあつたことをつい最近知つた。わが吹田市である。

「事業仕分け評価を実施しました」という吹田市の文書によると、吹田市版「仕分け」は、「平成20年度から」実施、609事業について実施方法を検証し、149事業(総額91億3千2百万円)の「見直し」を検討、と結果のついで。

驚いたのはその内容だ。「実施方法の見直しを検討」通常保育事業37億2千6百万円、留守家庭児童育成事業7億4千万円……「委託を検討」市民体育館4億3千9百万円……なんと全国行政評価ランキング近畿1位の最大の根拠となつた保育・児童保育事業や、府下で最も充実している体育館事業などは民営化・委託化、吹田市は手を引けばどうか、という「事業仕分け」結果なのだ。

「こんな大変な内容なのに、関係者をはじめ市民には、いつ誰が、どのような議論をして、何を根拠に、この仕分け」結果になったのか、まったく知らされていない。国の「事業仕分け」では内容はさておき蓮坊さんの顔は見えた。吹田市版「事業仕分け」の責任者はいったい誰なんだ。

「年越し派遣村」で明けた2009年が、「政権交代」で喜ばれようとしている。市民を無視し、誘ふべき市民の財産を平気で足踏にする吹田市の「仕分け人」たちに、その意味はわからないのかもしれない。